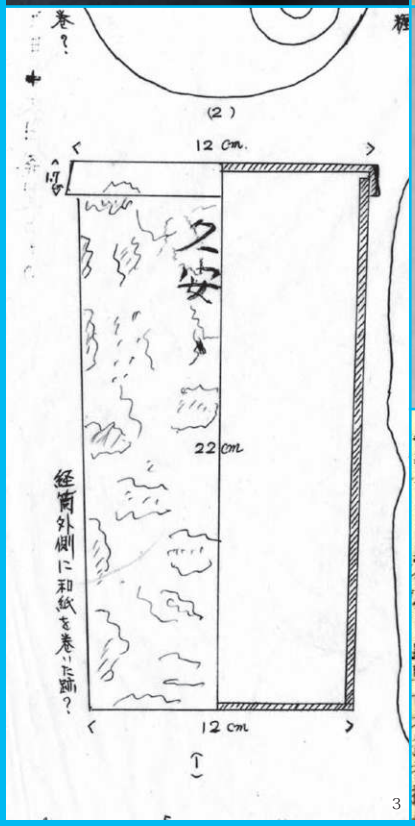
立正大学博物館　第 10 回特別展

経塚の諸相



2016

ごあいさつ

立正大学は、関東最古の伝統を誇る仏教系の大学であります。このため考古学においても、仏教考古学を第一の題目として研究をすすめて来ました。立正大学における仏教考古学は、石田茂作博士によって育てられました。石田茂作博士は仏教考古学を体系づけられた著名な考古学者であり、長く立正大学にご出講になりました。立正考古学初代の久保常晴先生、２代の坂詰秀一先生ともに博士に師事され、立正考古学の特徴を形成してこられました。

仏教考古学は、仏教に関する考古学的資料を取り扱う分野でありますが、経典を容器に入れ未来仏の出現に期すために造営された経塚は、古くから一つの重要な研究対象となってきました。石田博士が研究の基礎を果され、高弟の三宅敏之氏が研究を継続されました。三宅氏も石田博士の後をうけて、長く立正大学にご出講になり、蒐集された経塚関係の資料を立正大学博物館に寄贈されました。

今回の特別展示では、三宅敏之氏経塚関係資料をはじめとする立正大学博物館所蔵の経塚関係資料を展示するとともに、博物館の所在する熊谷の地を含む武蔵地域における経塚を中心として扱いました。また中世では、三宅敏之氏経塚関係資料に含まれる宝幢形経筒を対象として、経塚の諸相を通じて造営の背景を探ってみました。

平成 28 年 1 月

立正大学博物館長　池上　悟

目次

ごあいさつ／目次／凡例

1．経塚の概要 …… 1

2．立正大学の経塚研究 ……15

3．立正大学博物館所蔵　経塚関連資料 ……19

凡例

（1）本図録は、第 10 回特別展「経塚の諸相」の展示図録として作成しました。

（2）本図録の執筆は池上悟館長の指示により、三宅慶学芸員が担当しました。編集は館長の指示のもと池田奈緒子非常勤学芸員が担当しました。

（3）本図録に用いた挿図の出典及び、引用・参考した文献は巻末に掲げました。

（4）本特別展開催にあたり、以下の方々・機関にご協力を賜りました。感謝申し上げます。

朝霞市博物館、足利市教育委員会、宇都宮市教育委員会、埼玉県教育委員会、
草加市教育委員会、栃木県立博物館、八王子市市史編さん室、平沢寺、嵐山史跡の博物館、
熊谷市立妻沼小学校、青木隆志、足立佳代、飯塚真史、板橋稔、井上尚明、江田郁夫、
大塚美紗登、今平利幸、齋藤糸子、清地良太、高橋信夫、豊田貞男、渡政和（順不同、敬称略）

【表紙の写真】

1　９代将軍徳川家重墓出土の経石　2　福岡県飯盛山経塚出土瓦経　3　三宅敏之氏経塚関係資料
4　鳥取県竹内経塚出土泥塔経　5　埼玉県宮戸薬師堂山経塚出土の経筒
6　千葉県龍正院納経　7　千葉県大椎経塚出土の経石

１．経塚の概要

経塚とは、「経典を供養し地下に埋納した場所」のことを指します。その形状は、「塚」と称されているように、小規模な塚上施設を上部構造として営み、その封土中あるいは地下に主体部を設けている例が一般的です。主体部は、普通、小石室状のものをつくり、その中に経筒などを埋置した例が多くみられます。その他、方形土壙内にそれを納めている例などもあります。また、「塚」と称されていますが、実際には封土が明確でない例もあります。これらの経塚は、主に神社の境内や、霊地・聖地とされた山頂に築かれました。

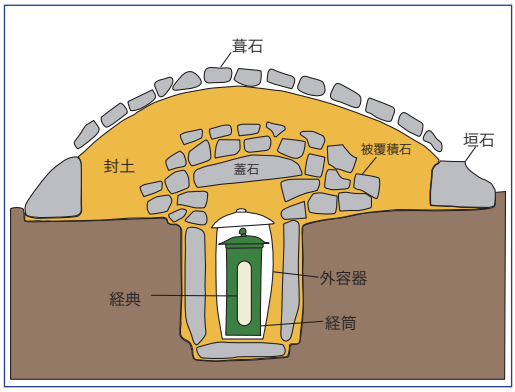
経典埋納の始源は、末法思想にあるといわれています。釈迦入滅後を「正法」、「像法」、「末法」の三時期に区分し、末法の時代は釈迦の教えだけが残り、その教えを実践する人がいなくなるため、混乱した世の中になると考えられていました。そこで、当時の仏教徒は、釈尊入滅の 56 億 7000 万年後に末法の世の衆生を救済するために出現する弥勒菩薩に備え、仏典を経筒に入れ地中に埋納して残そうとしました。これが、経塚の始まりであるとされています。

現在知り得る経塚の最古の例は、寛弘 4（1007）年に、左大臣藤原道長が大和吉野山の金峯山（現・山上ヶ岳）に直接赴いて自身で書写した経典を金銅筒に入れて埋めたという、金峯山経塚があげられます。これは元禄 4（1691）年に発見されました。

経塚に納められた経典は「紙本経」「瓦経」「銅板経」「滑石経」「青石経」「貝殻経」「礫石経」の 7 種類に分類することができます。

経典の種類は法華経が最も多く、その他、金剛頂経、無量義経、観普賢経、般若心経、阿弥陀経、大日経、弥勒経なども見られます。

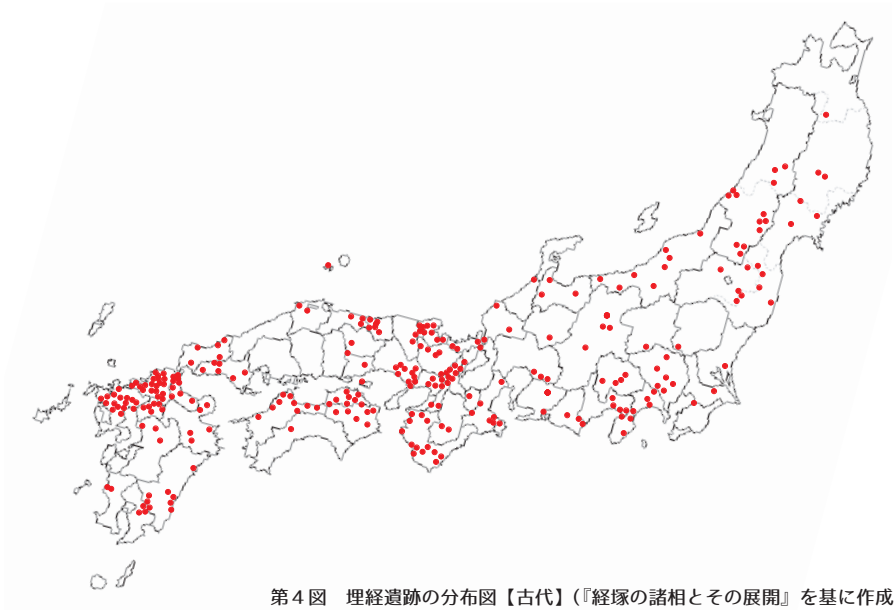
古代に開始された経塚造営は、その後、中世、近世と時代が下るにつれ、それぞれ様相の異なる経塚が造られました。



第１図　経塚模式図（『経塚遺宝』より作成）

第２図　金峯山経塚関連資料　経筒
（『金峯山経塚遺物の研究』より転載）

第３図　金峯山経塚関連資料　三宅敏之氏書写銘文



第４図　埋経遺跡の分布図【古代】（『経塚の諸相とその展開』を基に作成）

（１）古代の経塚（埋経の経塚）

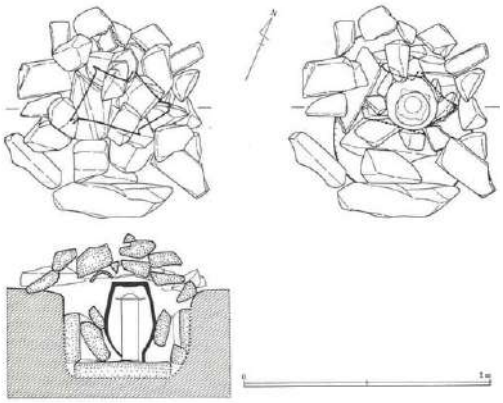
主として平安時代に築造され、11 世紀後半から 12 世紀末頃まで造営されます。埋納品としては、紙本経、瓦経などの経典類と、紙本経を納めた経筒類（銅製、石製、陶製などの経筒とこれを保護する甕などの外容器）が知られています。経筒には、発願者の氏名・目的・年次などが銘記されている例もあり、造営の願意を具体的に知ることができます。埋経の願意には、末世と末法を自覚し、弥勒の下生を予期する思想を反映するもののほか、「追善供養」「現世利益」「現世安穏・息災延命」「上品下生・極楽浄土」など個人の思いも多くあります。

また、副納品として、銅鏡、刀身、合子、銭貨、仏具などが確認されています。

各地で発見される埋経の遺跡を見てみると、畿内と九州に分布が濃密であり、二大文化圏と言うことができます。しかし、両地方にその数は劣るものの分布範囲は、国内の全域に広がっています。平安時代に始められた埋経の経塚は、12 世紀の末頃には衰退し始め、13 世紀以降の築造例は極めて少なくなります。

武蔵国内でも埋経の経塚は古代から中世にかけて造営されたことが知られています。現在確認できる遺跡数は、16 カ所です。

北武蔵における埋経の経塚は、妻沼経塚（熊谷市）、平沢寺経塚（嵐山町）、利仁神社経塚（東松山市）、大山経塚（朝霞市）、薬師堂山経塚（朝霞市）、烏山経塚（川越市）、喜多院境内経塚（川越市）の 7 カ所です。これらの経塚の中で、妻沼経塚と平沢寺経塚が現在確認できるこの地域



第５図　埋経の経塚（福岡県・武蔵寺第４号経塚）
（『武蔵寺経塚』より転載）

における最古の例で、12 世紀後半頃に造営されたことが確認できます。

南武蔵における埋経の経塚は、館町龍見寺経塚（八王子市）、宇津木台遺跡群内経塚（八王子市）、白山神社経塚（八王子市）、落合経塚（八王子市）、大丸城経塚（稲城市）、松蓮寺経塚（日野市）、狭間経塚（足立区）、実相寺経塚（大田区）、定光寺経塚（府中市）です。これらの中でも白山神社経塚は、仁平 4（1154）年に造営され、この地域で最も早い経塚であることが知られています。

武蔵国における埋経の遺跡は、利仁神社経塚出土鏡にある「願以此結縁値遇弥勒世」という銘文から、末法思想による弥勒信仰に基づいて造営されたことわかります。また、一方で同経塚出土の他の銅鏡には「為滅罪生善往生極楽」という願文も認められます。

このことから、武蔵国では末法思想・浄土思想に基づきながら、極楽往生などの多様な願意があったことが知られます。

平沢寺経塚（埼玉県嵐山町）

平沢寺は、比企郡嵐山町平沢に所在する天台宗の古刹として知られています。経筒は、その境内にある長者塚から享保年間頃（1716 ～ 1735 年）掘り出されたことが『新編武蔵風土記稿』に記載されています。

「享保ノ頃ナリシ境内ニツヅケル地ニ、土人長者塚トイヘル古キ塚ヲ掘シニ、古木ノ根ヨリ出シト云フ。銅ニテ尤モ古色ナルモノナリ。久安ハ今ヨリ六百七十年ノ余ニ及ベリ。其図右ノ如シ。」

現在残る遺物は、久安 4（1148）年銘を有する経筒のみで、高さ 24cm、口径 12.2cm を測る鋳銅製です。この経筒は北武蔵における最古級の経筒として、また古代の鋳物師藤原守道の銘があることから貴重な資料とされています。

〔文意〕沙門實與が勧進となり、久安 4 年 2 月 29 日に当国大主平茲縄とゆかりのものを施主として、経筒を納めた。この志は、施主及びすべての者の平等利益の為に行うものです。経筒の製作者は藤原守道、安部末恆、藤原助員である。

第６図　平沢寺経塚出土経筒
（平沢寺・嵐山史跡の博物館より提供）

第７図　平沢寺経塚出土経筒拓本
（三宅敏之氏経塚関係資料）

敬白　勧進沙門實與
奉施入如法経御筒一口
右志者為自他法界平等利益也
久安四年歳次戊辰二月廿九日　戊申　当國大主散位平朝臣茲縄方縁等
藤原守道
藤原助員
安部末恆

妻沼経塚（埼玉県熊谷市）

妻沼経塚は、妻沼町中心部の北方、国道 407 号線登戸の交差点から約 600m 東、妻沼小学校内に位置しています。ここは利根川の氾濫原内の自然堤防の縁辺部に立地し、標高は約 28m です。同じ自然堤防上には、聖天様の愛称で知られている歓喜院聖天堂や大我井神社などが位置しています。

妻沼経塚は、昭和 32（1957）年に妻沼小学校の拡張工事の際に偶然に発見され、県文化財専門職員であった小澤國平氏等によって緊急調査が行われました。現在、出土遺物は一括して東京国立博物館に収蔵されています。

発見から四半世紀後の昭和 57（1982）年、妻沼小学校内に「経塚之碑」が建てられ、報告書が復刻されました。現在、一帯は大我井遺跡に包括されています。

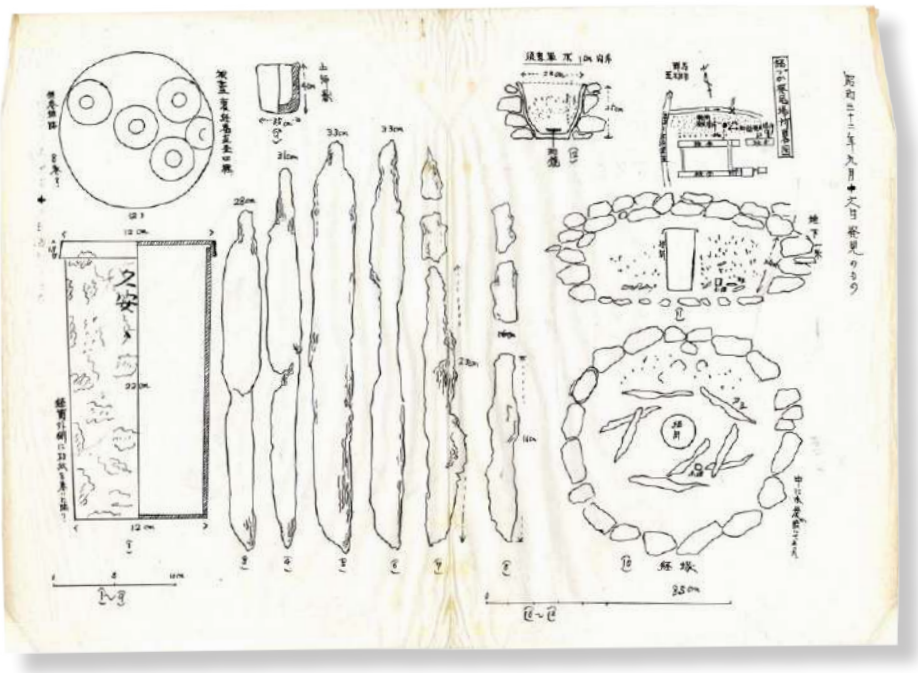
妻沼経塚では第 1 号～第 4 号までの 4 基の経塚が確認されました。各経塚からは多数の遺物が出土しました。第 1 号経塚から出土した鋳銅製経筒には「久安（1145 ～ 50 年）」銘の墨書が認められ、妻沼経塚が平安時代に造営されたことが明らかになりました。

第 1 号経塚

第 1 号経塚は、地表面から 1m 程下に川原石で造られた石室があり、その中に経筒が直立した状態で納められていました。

経筒は鋳銅製で、筒身と底部を一度に鋳造した一鋳式です。筒身高 21.6cm、口縁部外径 12.1cm、底径 10.9cm、厚さ 2.5 ～ 3mm 前後、蓋は平蓋で口縁部外径は 12.8cm 前後です。

筒身の 2 カ所に墨書が確認でき、「久安」銘が認められました。蓋の裏面には複数本の経巻の跡（径 3cm 前後）が残っています。副納品として経筒の周りには 7 口の短刀が取り囲むように水平に置かれていました。その他、コップ形の土製品も確認されています。



第８図　第１号経塚検出状況及び副納品
（三宅敏之氏経塚関係資料）

第 2 号経塚

第 2 号経塚からは、石室の中に常滑甕が安置された状態で確認されました。甕の底部付近からは、径 10.4cm の山吹双鳥鏡が 1 面出土しました。

第 3 号経塚

第 3 号経塚からは経筒が 1 口出土しています。経筒は鋳銅製で、筒身は一鋳式です。総高 24.8cm、筒身高 17.5cm、口縁部径 13.5cm、底径 13cm です。筒身に銘文はありません。蓋は宝珠形の把手がつく、被せ蓋です。側面に突帯が一条あり、口縁には二段造りの鍔がめぐっています。また、経典の種類は不明ですが経巻残片も確認されています。

副納品は 4 基の経塚の中で種類・数ともに一番豊富です。短刀は石室を取り囲むように配置され、最低 41 口ほど確認できます。1 口は経筒の台座の下に置かれていました。この他、藤花鏡、草花双鳥鏡、草花鳥鏡、菊花双鳥鏡など 6 面の和鏡、銅製花瓶、櫛、白磁、青磁、檜扇の一部と思われるものが出土しました。

第 4 号経塚

経筒は確認されず常滑甕や鏡などが出土しています。第 4 号経塚出土の常滑甕は、口径 41cm、高さ 69.8cm、胴径 77cm の大きさです。

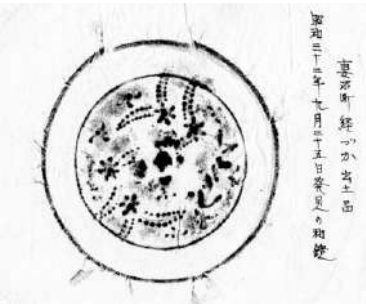
副納品は、短刀約 10 口、和鏡 2 面、白磁合子、檜扇、白磁片が確認されています。

妻沼経塚は中世墓と埋経遺構が複合した遺跡だとする指摘があります。そのため、祖先供養を目的として在地領主が檀越となり造営したことも考えられています。

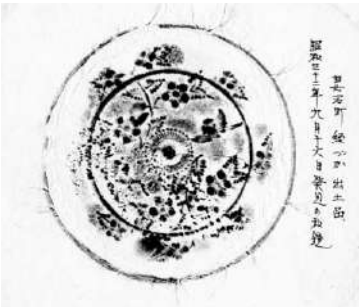
第 9 図　第 1 号経塚出土経筒

第 10 図　第 3 号経塚出土経筒

第 11 図　第 2 号経塚出土和鏡（山吹双鳥鏡）



第 12 図　第 3 号経塚出土和鏡拓本（草花双鳥鏡）



第 14 図　第 2 号経塚出土和鏡拓本（山吹双鳥鏡）

※全て三宅敏之氏経塚関係資料

宮戸薬師堂山経塚（埼玉県朝霞市）

この経塚は、朝霞市大字宮戸字大山 1062 の山林中に位置します。経塚の発見地は、北方に新河岸川を臨む標高 21m の台地上の東側斜面であり「薬師堂山」と呼ばれています。『新編武蔵風土記稿』には、宝蔵寺は、薬師堂山の辺りにあって「後此地ニウツリシ年月ハ詳ナラス」と記録されており、この経塚は宝蔵寺境内に所在していたと思われます。

この経塚からは、鋳銅製経筒 1 口、常滑製甕 2 口、常滑製鉢 1 口が一括して出土しています。これらの資料は、昭和 32 年 2 月 24 日、高橋鎌次郎氏が、山林を宅地化するために整地作業を行なった際に出土したもので、現在は埼玉県指定文化財に登録されています。

経筒は、高さ 22.2cm、径 9.8cm、厚さ 0.6mm を測る円筒型を呈しており、一鋳で造られた鋳銅製です。

経筒蓋には、径 10.5cm、縁高 0.6cm を測る和鏡（水辺蘆双雁鏡）が使用されていました。

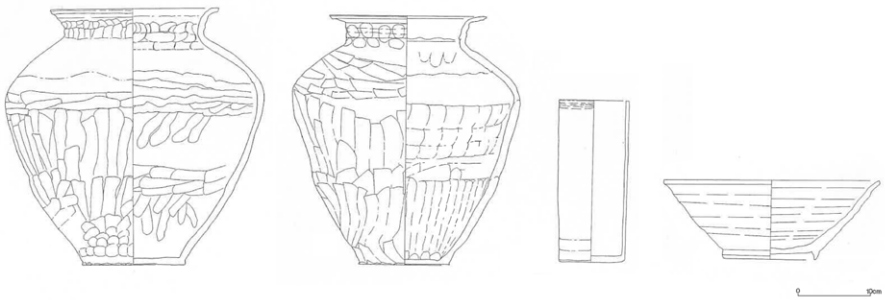
２点の常滑製の甕は、どちらかがこの経筒を収納した外容器と考えられています。大型の甕は、高さ 33cm、最大径 38cm、底径 14cm を測り、小型の甕は高さ 32cm、最大径 29.5cm、底径 12cm の大きさです。

常滑製の鉢は、この甕のどちらかに蓋として付随したものと考えられています。高さ 11cm、口径 29.5cm を測ります。

この経塚の築造年代は、常滑製甕の年代観や経筒の形状から 12 世紀末であろうと推定されています。

経塚造営の願意は、経筒や和鏡に銘文が刻まれていないため具体的なところは不明です。しかし、当経塚は平沢寺経塚と同様、寺院境内に築かれた可能性があるため寺院と密接な関係にあったことが指摘されています。また、この経塚の造営には当該地域の在地領主である広沢氏が檀越として関わっていた可能性も指摘されています。

第 14 図　宮戸薬師堂山経塚出土資料（朝霞市博物館蔵・写真提供／県指定文化財）



第 15 図　宮戸薬師堂山経塚出土資料（『埼玉県指定文化財調査報告書』第 19 集より転載）

白山神社経塚（東京都八王子市）

白山神社は、八王子市中山に所在しています。大栗川の支流中、山川が開析した谷戸の最奥部から、北の尾根を登った標高 170m の丘陵上に位置しています。白山神社の社殿の裏には小墳丘がかつてはあり、そこが経塚跡と推測されています。

白山神社では、江戸時代後期の文政 9（1826）年、明治 17（1884）年、大正 13（1924）年、昭和 51（1976）年と 4 回にわたって遺物が発見されています。

経塚関連資料は、白山神社（八王子市郷土資料館保管）に経巻 10 巻、銅製経筒 3 口、銅製経筒残片、陶製甕 1 口、経筒外容器 1 口、陶製壷 1 口、和鏡 4 面、檜扇残片、刀子残片、須恵器片、東京国立博物館に銅製経筒 1 口、和鏡 5 面、観普賢経と法華経の断簡が所蔵されています。

経典は法華経巻 4、巻 5、巻 6、巻 7 の他、無量義経と観普賢経が発見されており、一部の経巻には仁平 4（1154）年の紀年名が確認できます。

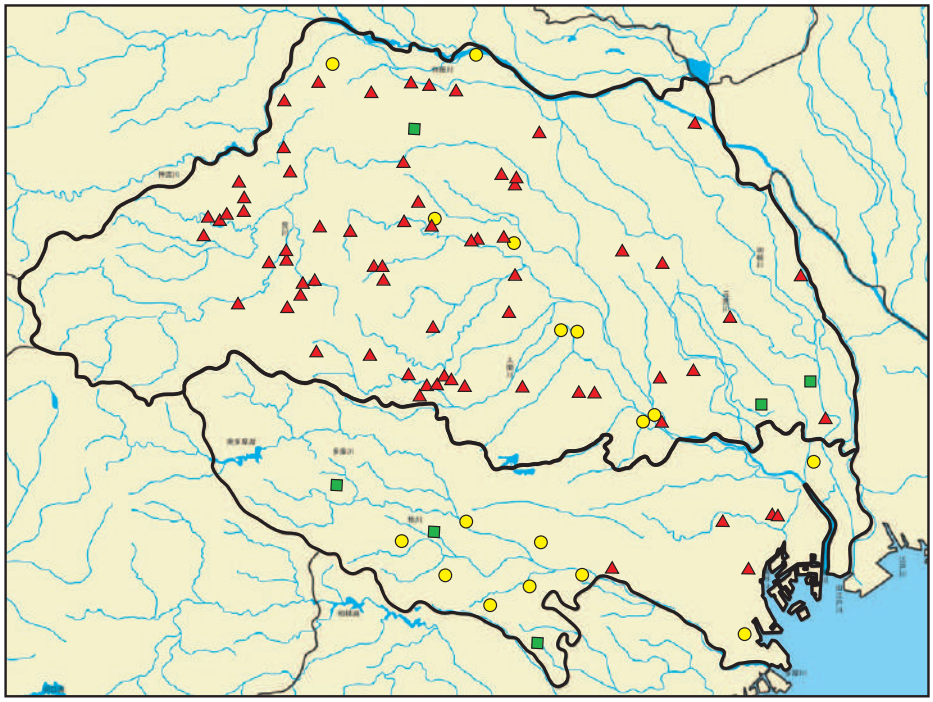
経巻の多くに奥書が確認でき、例えば観普賢経には「大歳甲戌□西仁平四年九月廿日□許武蔵国西郡 / 船木田御庄内長隆寺許　西谷出写了 / 勧進僧弁智　結縁者僧忠尊 / 蓮意」とあります。

この経塚の造営目的は、巻によって記載内容は若干異なりますが、これらの奥書を総合すれば、仁平 4（1154）年 9 月、武蔵国西郡船木田庄の長隆寺の西谷において、僧弁智の勧めで忠尊、蓮意、有阿、順応といった僧侶たちが結縁し、小野氏、清原氏等を檀越として、経典写経と埋納が行なわれたことが判明します。

第 17 図　白山神社経塚出土資料
（八王子市市史編さん室より提供）

第 18 図　白山神社経塚出土資料
（三宅敏之氏経塚関係資料）

第 19 図　白山神社経塚出土資料
（八王子市市史編さん室より提供）



第 19 図　武蔵国における経塚遺跡分布図

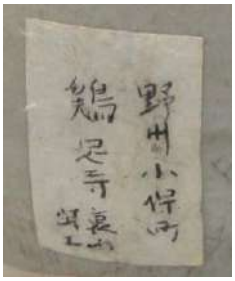
● 埋経の経塚　■ 埋経・納経の経塚　▲ 一石経塚

伝・鶏足寺裏山出土　白磁四耳壺（栃木県足利市）

この白磁四耳壺は、足利市小俣町に所在する鶏足寺の裏山から出土したとする紙が貼られています。高さ 21.9cm、口径 10.7cm、胴部の最大径は 17.5cm です。あまり肩が張らず、ふっくらと丸みを帯びた体部、「へ」の字状に折り曲げた口縁、全体に薄い作りなどの特徴から 12 世紀中頃に宋（中国）から輸入された磁器と考えられます。

白磁四耳壺は、12 ～ 13 世紀にかけて宋で生産されたものが、日本列島に数多くもたらされ、経筒の外容器や、蔵骨器として使用されました。壺の肩部四方に耳をもつことから「四耳壺」と呼ばれています。この四耳壺は、内部に炭化物や骨片がみられないこと、４つの耳が打ち欠かれていることなどから経筒の外容器として経塚に埋納された可能性があります。

鶏足寺は、平安時代初期に創建され、古代から中世にかけて地域の核となる重要な寺院でした。経塚が造営されるにふさわしいといえるでしょう。



第 20 図　伝・鶏足寺裏山出土白磁四耳壺（足利市教育委員会蔵）

第 21 図　奉納経筒発見地【中世】(『経塚の諸相とその展開』を基に作成)

（2）中世の経塚（納経・埋納の経塚）

中世の経塚築造の背景には、六十六部聖の存在が考えられます。本邦六十六州を廻国巡礼する聖は六十六部聖と呼ばれました。六十六部廻国聖とは、日本全国 66 カ国を巡礼し、1 国 1 カ所の霊場に法華経を 1 部ずつ納める宗教者のことをいいます。経筒を用いる納経方法は、13 世紀末期から始まり、16 世紀の永正から天正にかけての約 70 年間に普及し、全国的な規模で盛行しました。

六十六部廻国聖による納経は、1 国 1 カ所が原則的でしたが、中には 1 国内で 6 カ所あるいは、66 カ所をめぐった簡略形もあります。

16 世紀代の六十六部聖が奉納した経筒は円筒形、六角柱形、あるいは八角柱形のものが確認されています。六角柱形のものは、六角宝幢形経筒とも呼称されています。中世の奉納経筒は 400 口に近い数が確認されていますが、円筒形のものがもっとも多く、六角柱形、八角柱形のものは全国的にあまり確認されていません。これらの経筒は小形のものが多く、規格化されていたことが想定されています。

経筒は、土中に埋納する場合と、寺社境内に設けられた奉納所や鉄塔に奉納したものがあります。つまり同一の形状の経筒が異なる扱いを受けていました。

副納品としては、鏡、利器、銭貨、仏像、仏具などが知られていますが、古代の埋経と比べるとこれらの副納品の数や種類はそれほど多くはありません。

この時期の経筒を見てみると、「大乗妙典」「経王」「妙典」「如法経」「大乗」などの銘文が多くみられます。これらの経典名はすべて、法華経を意味したものと考えられることから、経筒内には法華経を納入したものと想定されます。

中世の奉納経筒は「奉納大乗妙典六十六部」という主銘文を中心にその左右に法華経を守護する「十羅刹女」と「三十番神」の文字を配し、さらに、この経筒を奉納した六十六部聖の国名と法名、および奉納の年月日などを三行から五行程度に鐫刻し、ときに簡単な銘文を付加する場合もあります。

「十羅刹女」は妙法蓮華経巻第八・陀羅尼品

第二十六に、「爾時有羅刹女等、一名藍婆、二名毘藍婆、三名曲歯、四名華歯、五名黒歯、六名多髪、七名無厭足、八名持瓔珞、九名皇諦、十名奪一切衆生精気、是十羅刹女、…我等亦欲擁護、読誦受持、法華経者、除其衰患、」と説かれています。つまり、法華経を読誦して、受持するものを擁護する十女神のことを指します。

「三十番神」は如法経の守護神として法華経を所依の経典とする天台宗や日蓮宗の信仰と深い関係を持ちます。これらの宗派では三十番神を法華経の守護神として考えており、１ヶ月30日を三十の守護神が日毎交替で法華経の守護に当たるよう諸神を配しています。

経筒に記された願文を見てみると、現世利益や「逆修供養」、父母などの「追善供養」に関係するものが多くみられます。

古代の埋経の場合には、末法観と弥勒思想、これに如法経作法、さらには追善供養などが結合し、各地に地域的な特色の濃い多様な経供養が展開しています。

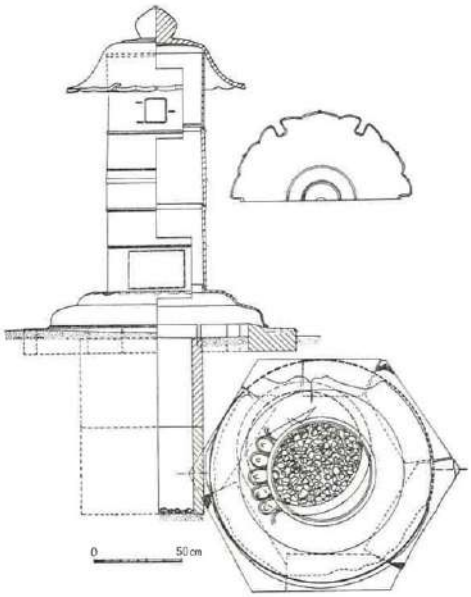
しかし、中世の六十六部聖による納経はそれほど地域差が見出せません。これは、国境を越えて同一主旨の納経をするという、六十六部聖のもつ廻国巡礼の特性を反映しています。

武蔵国内で現在確認できる中世の納経経塚は６カ所（北武蔵３カ所、南武蔵３カ所）です。また、武蔵国以外の関東地方では、茨城県で12カ所、栃木県で９カ所、群馬県で６カ所、千葉県で６カ所確認されています。

北武蔵における納経の経塚は、柿木経塚（草加市）、上原経塚（深谷市）、金剛寺経塚（川口市）が知られています。柿木経塚出土経筒は六角宝幢形経筒、上原経塚出土経筒は八角柱形を呈しています。この八角柱形経筒は上原経塚出土のものを含め全国で３例しか確認されておらず特殊な遺物と言えます。

南武蔵における納経の経塚は、諏訪神社経塚（八王子市）、成瀬経塚（町田市）、大悲願寺蔵品（あきる野市）が知られています。大悲願寺に奉納された六角宝幢形経筒は、天正13（1585）年の銘があり、六十六部聖による奉納経筒の終末期に位置づけられています。また、出土地は不明ですが、最も古い例としては、永正８（1511）年のものが知られています。

この時代の円筒形の経筒は数百点も発見されていますが、六角宝幢形経筒は、まだ40例程度しか確認されていません。その中で年号のわかるものは９例程度です。その上、出土地が明確なものや、伝来の由緒が正しいものは、さらにその半数余りしかありません。六角宝幢形経筒は八角柱形経筒よりもその数は多いものの、やはり稀少な遺物であるといえます。



第22図　奉納鉄塔（島根県大田市・南八幡宮）
（『島根県文化財調査報告』第１集　より転載）

奉納鉄塔の例

中世に造立された奉納鉄塔は数カ所が知られていますが、全容を窺うことができるものは、石見国の南八幡宮のみにあります。ここからは関東各地から奉納された小形経筒も多数確認されています。

聖山公園遺跡・2号塚出土経筒（栃木県宇都宮市）
六角宝幢形経筒

聖山公園遺跡が立地する宇都宮市上欠町は、宇都宮市の中心部から西南西へ約5kmの丘陵地であり、西は鹿沼市に接しています。

聖山公園遺跡内には、3基の塚があります。3基とも平面が円形の塚です。各塚の大きさは、1号塚は径7.5m、高さ1.3m、2号塚は径6m、高さ0.8m、3号塚は、径7.3m、高さ1.2mです。そのうちの2号塚の盛土中から六角宝幢形の経筒が出土しました。埋納施設と思われる遺構は認められず、土中に埋められたものと思われます。

経筒は厚さ1mmの銅板製で、一部に鍍金の痕が残っています。形状は六角柱状で、高さは10.8cmです。底部は被底部の平底で、2個の爪で留められています。側面には観音開きの扉があり、留め金が付けられています。なお蓋は検出されていません。銘文は両扉の内面および裏面に線刻されています。

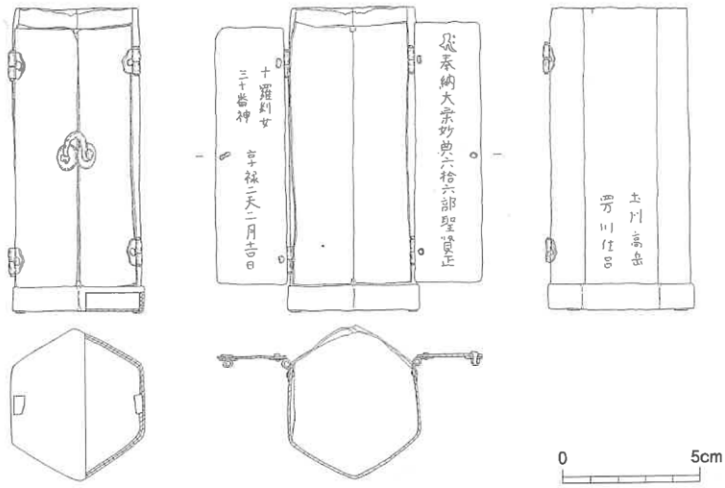
銘文から、この経筒は、享禄2（1592）年に土州（高知県）の廻国聖によって奉納されたことがわかります。

第23図　聖山公園遺跡・2号塚出土
六角宝幢形経筒（栃木県立博物館蔵）

［右扉］【梵字】奉納大乗妙典六拾六部聖賢正

［左扉］十羅刹女
三十番神
享禄二天二月吉日

［裏面］土州高岳
四万川住呂



第24図　六角宝幢形経筒実測図
（『聖山公園遺跡・根古谷台遺跡発掘調査』より転載）

柿木経塚（埼玉県草加市）
六角宝幢形経筒

この経塚は草加市柿木町 1756 番地、中川の自然堤防上に所在していました。現在では削平されて存在していませんが、明治初頭まで塚が存在したといわれています。

この経塚は、面積60㎡、高さ 4m くらいであったといわれ、経筒は明治 11 年 5 月 21 日、地主の豊田氏宅の庭の整備のために塚を掘ったところ出土したと伝えられています。出土した経筒は、中世に特徴的な金銅製六角宝幢形経筒であり、刀子の出土も知られています。

経筒は、一枚の銅板を折り曲げて、六角の筒形にしたものです。現在は、6 枚に分かれ、板はいずれも縦 9.5cm、幅 2.5cm です。6 枚のうちの 1 枚には仏像と銘が、2 枚には銘のみが確認されます。また、その下方には高さ約 1.7cm の縦連子様のものが 7 ～ 8 本打ち出されており、全体では 48 本になります。

経筒の底部は、多少欠けていますが、蓮の葉の形になっています。側面にある線は、葉脈を表しています。なお、台の上に小さな溝が 4 カ所ありますが、これは経筒の下方に小突起を切り出して、この溝に差し込んで安定させた跡です。いま、その突起のいくつかは、痛んではいますが、銅板の下方に残っています。また、蓋は確認されていません。

銘文によると、播州つまり現在の兵庫県の住人である快円上人が経典を奉納することを発願したものであることが確認されます。

この経筒にある「一国六部」の詳細は不明ですが、「一国」は特定の国を表し、「六部」は廻国者の別名を示す六十六部聖を省略したものとも考えられます。「当年今月吉日」は特定の年月日を意味するものではなく、廻国にあたって予め用意した経筒を納経に用いたことがうかがわれます。

この経筒については、『草加の歴史』（昭和 38 年 3 月）、『埼玉考古』（昭和 40 年）などの文献に早くから紹介され、三宅敏之氏による「六角宝幢形経筒について」（『東京国立博物館紀要』4 昭和 43 年）が刊行された後、『草加市の文化財 (1) －調査報告－』（昭和 51 年）にその詳細が掲載されました。

三十番神　当年今月吉日
（釈迦坐像）奉納経王一国六部
十羅刹女　播州之住快円上人

第 25 図　柿木経塚出土･六角宝幢形経筒（豊田貞男氏蔵）

（3）近世（納経顕彰）の経塚

一石経塚

一石経塚の造営は、室町時代の後半から流行し、江戸時代に最盛期を迎えました。一方、近世にはこれまで行われていた経筒を用いた経塚の築造はほとんど見られません。

近世の一石経塚は、北海道南部から沖縄県までの、本邦の全域で認められています。

近世の一石経塚は、河原石などに経文を墨書、あるいは朱書したもので、一石に 1 文字づつ記す「一字一石経」と、複数の文字を記す「多字一石経」、梵字を記すもの、願文、供養者名、供養年月日などを記すものがありますが、これらは一石経と総称されています。

経石は一遺構から数万ほどの一石経が発見されることも少なくありません。推定される経典が法華経であり、その文字数の 69,844 字によるものかと考えられています。また、副納品としては銭貨、刀身などが発見される例もありますが、大半は経石のみです。

この一石経塚の築造は、個人が発願し願主となり造営する場合や、高僧、有識者が願主となり、結衆により築造される場合があります。その築造背景として積善業、功徳業の一つの形として、「極楽往生」、「出離解脱」、「現世幸福」、「病魔退散」、「五穀豊穣」、「死者供養」など様々な意図が伺えます。

一石経は、塚を築き経石をまとめて土中したものの他に、建造物の地鎮に用いられたものや、骨蔵器とともに埋納された例、経石を散布した例もあります。地鎮に用いられた経石の好例として、北武蔵における宝蔵寺（飯能市）のものがあげられます。宝蔵寺の礫石経は、旧本堂建物の須弥壇下に 4.5m × 1.65m、深さ 0.2 ～ 0.3m の長方形の土坑を穿て埋納されました。

出土した経石には次のような銘文が墨書されています。「願以此功徳 / 普及於一切 / 我等与衆生 / 皆共成仏道」これは法華経巻三・化城喩品第七の一部で、梵天が仏に宮殿を奉ったときの偈の中にある廻向文です。

また、裏面には、多福を望むことが銘文として残されています。その他の経石には寛文 9（1669）年銘の墨書が認められています。

地上の標識として「一字一石経経稗」を建立する例も存在します。経碑には「父母成仏」「自他平等利益」「諸願成就」など様々な願意が伺えます。

現在確認されている武蔵国内の経石が埋納されている遺跡数は、北武蔵 64 カ所、南武蔵 5 カ所です。

北武蔵における、経石が埋納されている遺跡は、浄禅寺経塚（入間郡大井町）、秩父神社経塚（秩父市）、宝蔵寺経塚（飯能市）をはじめ北武蔵全域で 64 カ所確認され、その内の 34 例が寺院境内や墓地に造営されたことが明らかにされています。

南武蔵では、浄心寺経塚（台東区）などが知られています。

第 26 図　礫石経（埼玉県・宝蔵寺出土資料）
（『宝蔵寺経塚調査報告書』より転載）

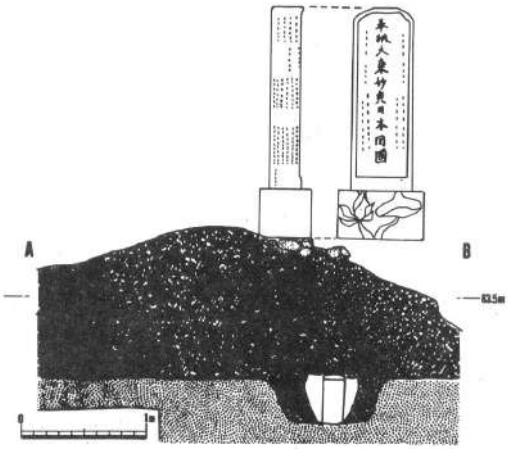
廻国納経

近世には一石経塚の他に六十六部聖による廻国納経が確認されています。中世では各地に奉納された経筒により廻国の実態が確認されていますが、近世では納札、納経や供養塔などによって存在が知られています。

奉納されたものとしては木製や紙製の納札があります。近世の木製の納札には、「天下泰平 / 国土安全」や「天下和順 / 日月清明」などが記されています。これらは中世のものと比較して簡略・小形化しています。

紙製のものは手書きのものと木版の２種類が確認されており、「奉納大乗妙典六十六部日本廻國」とする、六十六州に大乗妙典を奉納することを目的とした廻國を意図したものと、「奉納大乗妙典六十六部日本廻國」に加えて観音霊場の巡礼を明記したものなどがあります。

廻国納経の一例として平尾経塚（東京都稲城市）があげられます。この経塚は、僧侶あるいは聖が民衆に対して勧化を行い、廻国と勧化成就に際して経典が埋納されています。この経塚には経碑が建てられており、銘文には、聖が商人と民衆を勧化し、自ら巡礼を行い成就記念に大檀那の居住地である栗木村付近の平尾に塚を築き経筒を埋納したことが記されています。



第 27 図　経碑と経塚
（『稲城市平尾経塚発掘調査報告』より転載）

【コラム①】

下総・龍正院　納札と納経資料

坂東二十八番の観音巡礼札所である滑河観音、下総・龍正院境内には、銅造の宝篋印塔が造立されています。平成３年度にこの塔の解体修理が行なわれ、経巻や廻国・巡礼納札が確認されました。宝篋印塔の塔身内部に収納されていたものの主体は、塔造立のための喜捨を募るにあたって、巻末に戒名ないしは俗名を記した経巻です。「勧化帳」に記された助力者の名前は、近隣の村々のみではなく、利根川の対岸の常陸各地にまで及び、総数は 500 名を超えています。

第 28 図　下総･龍正院廻国納経資料（立正大学博物館蔵）

2．立正大学の経塚研究

立正大学は仏教系大学として、考古学も仏教考古学を最重要な分野として研究を進めてきております。この指針を示されたのは、この分野で先駆的研究を果たされた石田茂作博士です。その後、本学における仏教考古学は久保常晴博士に引き継がれ、立正大学名誉教授である坂詰秀一博士によって牽引されてきました。

第 29 図　石田茂作博士（右）と三宅敏之先生（左）
和歌山県熊野本宮出土の経筒と外筒（保安 2（1121）年）
昭和 47 年 11 月東京国立博物館にて
（三宅敏之氏経塚関係資料）

石田茂作博士の業績

石田茂作博士は仏教考古学の体系化を果たし、経塚研究においても先駆的かつ総括的な研究を推進させました。

石田博士の経塚に関する最大の業績は、大正 15 年 7 月から昭和 2 年 5 月までに刊行された國史講習會（雄山閣）の考古学講座の中で発表された「経塚」です。この講座の「経塚」は、高橋健自、和田千吉らによる先行業績と、それまでに発見された経塚関係資料を集成・分類した上に展開されました。

その内容は、如法経と法華経の関係、経塚遺物と経塚年表、経塚の経文（紙本経、瓦経、石経）、経文の容器（経筒、経筒の外容器）、伴出遺物（鏡鑑、利器、合子）、古銭、仏像、仏具、遺跡、経塚地名表、起源などの経塚全般にわたるもので、この時期までの豊富な発見例を集成して、これを論述されました。

この「経塚」は今日なお、経塚研究に欠くことのできない基本文献として、学史に残るものです。石田博士以後の経塚研究は、この「経塚」を基として進められてきました。

さらに、この時期には、経塚研究を代表する 3 冊の報告書が刊行されており、そのうちの 2 冊を石田博士が手掛けられました。昭和 2（1927）年に帝室博物館学報の第 5 冊として発表した『那智発掘佛教遺物の研究』と、昭和 12（1937）年に帝室博物館学報の第 8 冊として刊行された『金峯山経塚遺物の研究』です。これらは経塚研究史上、最も重要な研究書、不朽の名著といえます。

さらに、瓦経に関しても積極的に研究されました。石田博士の論考「瓦経の研究」（『瀬戸内考古学』第 2 巻第 1 号 昭和 34 年）は瓦経研究の基礎的なものとして、今なお重要な文献として位置づけられています。

これらは、石田博士の業績の一部に過ぎず、まさに経塚研究の基礎は石田博士によって築かれたと言えます。

【石田茂作博士主要著書一覧】

『古瓦図鑑』（昭和 5 年）
『写経より見たる奈良仏教の研究』（昭和 5 年）
『飛鳥時代寺院阯の研究』（昭和 11 年）
『総説飛鳥寺院阯の研究』（昭和 19 年）
『奈良時代文化雑攷』（昭和 19 年）
『伽藍論攷』（仏教考古学の研究第 1）（昭和 23 年）
『法隆寺と正倉院』（昭和 24 年）
『東大寺と国分寺』（昭和 34 年）
『密教法具』（昭和 40 年）
『日本仏塔の研究』（昭和 44 年）

三宅敏之先生の業績

石田茂作博士の研究以降、全国各地で経塚の発見と報告例が増加し、一方では地域的な資料集成も盛んに進められるようになりました。三宅敏之氏は石田博士に師事され、積極的に経塚研究を行われました。

三宅氏が残された経塚関連の著論考は83編にも上ります。その視点は幅広く、経筒や遺跡についてはもちろんのこと、瓦経、銅板経、滑石経から貝殻経、一字一石経に関する論考まであり非常に多様です。

三宅氏の最大の業績は、論文集『経塚論攷』(昭和58年）にみることができます。これは三宅氏の研究の一つの到達点と言えます。この論文集は3部構成となっており、第1部では「経塚造営の諸相」として「藤原道長の埋経」「清原信俊の埋経」「藤原兼実の埋経」「富士上人末代の埋経」の諸論考をはじめ、三宅氏の多年にわたる優れた研究成果が収録されています。

第2部では「遺跡と遺物」として山梨・塔の越、愛知・善門寺、三重・仙宮神社、岐阜・養老神社、京都・稲荷山、山口・日輪寺、愛媛・堂ヶ谷など全国の経塚遺跡と遺物の調査研究について収録されています。なかでも論考「六角宝幢式経筒について」(『東京国立博物館紀要』第4号、昭和43年）はよく知られています。

さらに第3部では「経塚研究史とその動向」として、石田博士の経塚関連の主な業績を纏めるとともに、昭和37年から昭和53年までの経塚研究の現状と課題を明確にされています。これらは経塚研究の学史を学ぶ際になくてはならないものとなっています。『経塚論攷』はこの分野のまとまった研究書であり、後進の研究者にとって欠くことのできないものです。

その他、昭和52年には石田博士の監修で編まれた『新版仏教考古学講座』6（経典・経塚）には「経塚の遺物」、「遺構と遺物」、「経塚の分布」と言うように多くの部分を三宅氏が担当されています。本書は、石田博士の『経塚』(昭和2年）以後における、成果の積み重ねが充分に行なわれた、最も優れた総合的な経塚研究書の一つと言えます。

また、同書に載せられている「経塚遺物年表」には、実に565件にものぼる紀年銘を有する遺物が収められており、三宅氏の手によって基礎的資料の整備が一段と進められたことが分かります。

三宅敏之氏は、昭和55年から19年間にわたり立正大学に出講され、多くの学生に講義されました。

三宅氏は平成18年3月（享年81歳）に他界されました。ご遺族の方から三宅敏之氏が長年に渡り蒐集された資料の中でも、特に経塚関連資料を中心に寄贈の申し出をいただき、平成19年に立正大学博物館で「三宅敏之氏経塚関係資料」として受贈することとなりました。

【三宅敏之氏略歴】

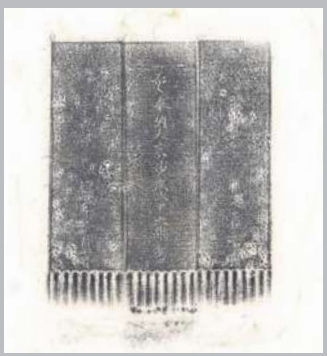
昭和42年5月
　東京国立博物館学芸部考古課原史室長
昭和45年4月
　東京国立博物館学芸部考古課有史室長
昭和48年4月
　東京国立博物館学芸部考古課長
昭和55年4月
　東京国立博物館学芸部長
昭和55年4月
　立正大学文学部講師就任
昭和58年2月
　東京国立博物館次長
昭和60年3月
　東京国立博物館退職
平成11年3月
　立正大学文学部講師退職

三宅敏之氏経塚関係資料

論文「六角宝幢形経筒について」(『東京国立博物館紀要』第４号　昭和 43 年)

この論文は、当時確認できた六角宝幢形経筒を全て集成し、総合的にまとめられています。構成は、１. はじめに、2. 遺品と概要、3. 形状と構造、4. 銘文と図像、5. 収納品と埋納状況、6. 考察の全６章からなっています。

この論文は、16 世紀前半の廻国納経に伴う経筒に関する研究成果で、これまで古代中心であった経塚研究に新しい方向を示す業績として画期的なものです。さらに、六角宝幢形経筒については、基礎文献としての地位を確立しています。



（右）石田茂作博士所蔵経筒　拓本
（中）石田茂作博士所蔵経筒　実測図
（左）石田茂作博士所蔵経筒　写真

（右）東京都大悲願寺所蔵経筒　拓本
（左）東京都大悲願寺所蔵経筒　実測図

第 30 図　論文「六角宝幢形経筒について」使用図版
（三宅敏之氏経塚関係資料）

坂詰秀一博士の業績

（立正大学名誉教授・立正大学博物館元館長）

坂詰秀一博士が経塚研究に果たされた業績として、「経塚の調査」「埋経の源流をめぐる問題」「経塚の概念」の３つの論考をあげることができます。

「経塚の調査」（『歴史公論』10、昭和 51 年）では、先学の古代の経塚を中心としたこれまでの研究に比べ、中・近世に築造された経塚の研究が立ち遅れていることを指摘されています。そして全国に分布している一石経の調査の必要性を説き、経塚研究に石田博士以来の新たな方向性を示されました。この「経塚の調査」が発表されて以来、従来あまり注目されていなかった一石経に関する調査報告書も増加し始めました。立正大学考古学研究室では坂詰博士監修のもと『礫石経の世界』を刊行し、全国の一石経塚についてまとめました。

「埋経の源流をめぐる問題」（『古代學論叢』、昭和 58 年）では、わが国の埋経の源流の一つを朝鮮半島にも求めることが出来るという説を提唱されました。

経塚の起源については、日本で創始されたとする石田茂作博士の説が一般的です。しかし坂詰博士は、昭和 43 年の「資料・高麗大学校所蔵の経筒」、昭和 44 年の「埋経の源流」で朝鮮半島説を説き、昭和 58 年には「埋経の源流をめぐる問題」として、朝鮮半島内で発見された経筒、石経などの遺物を通して、一つの問題提起を行われました。

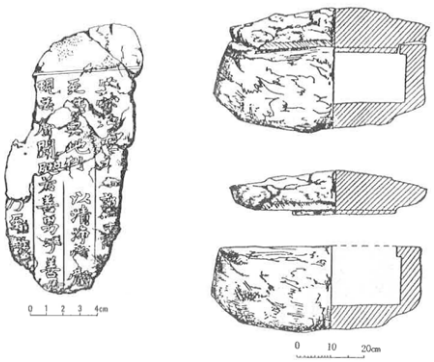
これまで、朝鮮半島における埋経に関する遺物や遺跡に対する学術的な関心はきわめて低く十分な資料を得にくい状況でした。それにも関わらず、埋経を東北アジアにおける仏教文化現象の一つとして捉える方向は、わが国の経塚の起源に新たな視座を与える上で重要な試みであったといえます。

「経塚の概念」（『古代学研究所紀要』第１号、平成２年）では、既に学術的に定着している「経塚」という用語の“あいまいさ”を学史的に紐解き、この用語に固執し続けることに警鐘を鳴らされています。そのなかで、古代の「埋経遺跡」、中世の「納経、埋経遺跡」、近世の「納経顕彰遺跡」の呼称こそ単なる「経塚」よりも理に適っていると指摘されています。

坂詰秀一博士

【坂詰秀一博士主要著書】

『歴史考古学研究』１（昭和 44 年）
『歴史考古学の構想と展開』（昭和 52 年）
『仏教考古学調査法』（昭和 53 年）
『図録歴史考古学の基礎知識』（昭和 55 年）
『歴史考古学研究』２（昭和 57 年）
『歴史考古学の視覚と実践』（平成２年）
『仏教考古学の構想　その視点と展開』（平成 12 年）
『歴史と宗教の考古学』（平成 12 年）
『釈迦の故郷を掘る』（平成 27 年）



第 31 図　朝鮮半島出土の紙本経と経箱
（坂詰秀一「埋経の源流をめぐる問題」より転載）

3．立正大学博物館所蔵　経塚関連資料

瓦経

瓦経とは、方形あるいは長方形の粘土板に、経典を書写して焼成したものをいいます。経塚の多くには紙に経典を書写した紙本経を埋納していますが、近畿地方から九州地方にかけての西日本では、不朽の材料である粘土板に経典を書写した瓦経が作られています。

瓦経は、釈尊の正しい教えが行なわれなくなる末法の世に入ると信じられた永承７（1052）年以後に、経典を保存するために始まった埋経に伴って創案されたものです。

伝・大和橘寺出土一仏一字瓦経片

この瓦経片は、瓦経の側縁及び底縁の一部を遺存したもので、横 4.1cm、縦 5.4cm、厚さ 1.4cm を測る、焼成の良好な淡黒褐色を呈する資料です。表裏両面には、陽出の線によって蓮華座に坐した光背を有する仏像が表されており、仏像の身体中央に経文１字（「法」「優」）が刻まれています。本資料と酷似する資料が兵庫県朝来市の楽音寺や、京都府福知山市の道勘山古墳からそれぞれ出土しています。これらの一仏一字瓦経は、多数の仏坐像を彫刻した型を粘土板に押圧して製作したものです。

第 32 図　伝・大和橘寺出土一仏一字瓦経片
（立正大学博物館蔵）

筑前飯盛山経塚出土瓦経（福岡県福岡市）

この瓦経は、福岡県福岡市西区に所在する飯盛山経塚からの出土品です。大きさは遺存する横幅 12cm、縦幅 10cm、厚さ 1.6cm を測り、色調は淡黄橙色を呈しています。

表裏面に６行の経文を確認することができます。幅 1.8cm の間隔で罫線が引かれており、この幅をもって 10 行で復元すると、縦 22cm、横 19cm ほどの大きさになります。この資料は法華経・巻五安楽行品の破片です。

本資料を含む飯盛山経塚出土瓦経は、永久２（1114）年の紀年銘資料が知られ、瓦経片からの推定では、法華経 208 枚、無量義経 23 枚、勧普賢経 21 枚、仁王経 39 枚、阿弥陀経６枚、般若心経１枚の計 297 枚が埋納されたものと想定されています。

第 33 図　筑前飯盛山経塚出土瓦経（立正大学博物館蔵）

泥塔経

泥塔経の代表例として竹内経塚出土品が知られています。竹内経塚は鳥取県東伯郡琴浦町の山間谷部に位置し、昭和初年に多量の泥塔経が出土したとされます。出土した泥塔経は巻間に広く流布し、各地の博物館および個人蒐集品として収蔵されています。その最大の特徴としては、泥塔の基台部を中心に経文と考えられる文字が線刻されている点であり、この点をして無二の「泥塔経」と呼称されています。

経塚の現状は、勝田川の左岸の杉林中の北に向い低くなる地勢を 1 m ほどの段形により区切られた、段に接した南側の高い部分に径 5m、高さ 1.7m ほどの墳丘が遺存しており、表面は全面人頭大の河原石で覆われています。頂部には二尺大の長石が配されており、この長石で区画された中が一段低く、この部分より泥塔経が出土しました。この泥塔経出土の遺構は、明確な墳丘を伴う経塚として認識できます。

現在確認できる各地に所蔵されている泥塔経の資料総数は約 700 点であり、その内の僅か 11 例に複数文字資料が確認でき、これらによって書写された経典を推定することができます。

例えば、宝塔形泥塔の裏面に梵字のア・バンに続き「定慧力」、表面基礎部の平面と斜面に「荘厳」と確認できる偈文は、法華経第二方便品に相当します。また、宝塔形泥塔の裏面に梵字のア・バンに続き「如人」と確認できる偈文は、法華経第三譬喩品に相当します。その他、法華経第十四安楽行品と法華経第七化城喩品、法華経第四信解品などの経典が確認できます。

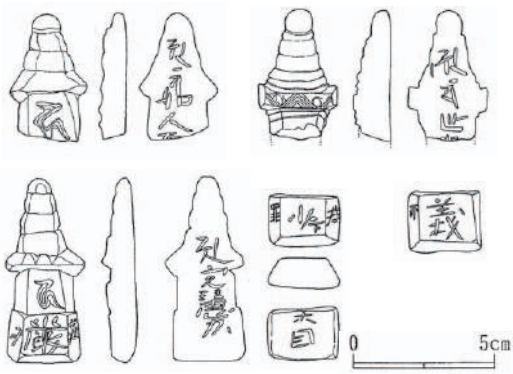
また、下半部を欠損した宝篋印塔形泥塔の裏面に「十千」と確認できる資料は、法華三経のうちの観普賢菩薩行法経の部分に該当するものと思われます。

以上確認できるところは法華経二十八品のうちの六品分と、1 例は法華三部経のうちの結経とされる観普賢菩薩行法経と想定できます。

従って竹内経塚から出土した泥塔経に書写された経典は、確認・想定された経典に開経とされる無量義経を加えた法華三部経であったと考えられます。

伯耆竹内経塚関連資料（鳥取県東伯郡琴浦町）

立正大学博物館蔵の竹内経塚出土泥塔経は、長さ 0.7 ～ 5.0cm、幅 1.9 ～ 3.2cm、厚さ 1.0 ～ 1.9cm の大きさの扁平泥塔で、造形の違いにより宝塔形と宝篋印塔形に分類されています。塔身には地蔵菩薩の梵字種子である「カ」を表し、基礎には経文が一字ずつ刻んであります。泥塔経の正確な埋納年代は不明ですが、この地に特徴的な「赤碕塔」が 14 世紀の南北朝期を主体として造立されたものと考えられることから、泥塔経もまたこの頃の製作と考えられます。



第 34 図　複数文字資料実測図

第 35 図　伯耆竹内経塚関連資料（立正大学博物館蔵）

【コラム②】

経石

経石は石経とも呼ばれ、石に仏教経典を書写したものです。一石経は古代の弥勒出世にまで伝えることを目的とした埋経とは異なり、書写することに重要性を見出した作善業であり、その起源は笹塔婆、柿経などに求められると想定されています。

経石は江戸時代に流行し、寺院、墓地、神社、高地、古墳の墳丘など様々な場所に埋納されました。経石は多数作善を目的としたものから追善供養や現世利益といった様々な願意に基づき埋納されました。また、経石は様々な宗教儀礼の中で埋納されたものがあり、仏教儀礼以外でも埋納されたことが知られています。

経石には礫石経、滑石経、青石経があり、立正大学博物館では千葉市大椎経塚出土の礫石経と、９代将軍徳川家重墓出土の石経を所蔵しています。

第 36 図　千葉市大椎経塚出土の経石
（立正大学博物館蔵）

９代将軍徳川家重墓出土の経石

増上寺境内、徳川将軍家墓所内で明確に内部から石経の埋納が確認できたのは 9 代家重墓、12 代家慶墓、14 代家茂墓です。特に 9 代将軍徳川家重墓からは最も多くの経石が確認されており、方解石の表裏に一字ずつ書写した経石（一字一石経）が 12,674 個も発見されました。

墓の構造は、石槨を構築し、この石槨内に銅製と木製による五重構造の棺が納められていました。石経は棺と外槨の間に薄い板石により造作された施設の中に納められており、棺の上部の四方を囲むように埋納されていました。

立正大学博物館にはこの経石が 19 点収蔵されています。経石の大きさは縦横約 2.0cm、厚さ約 0.8 ～ 1.0cm の扁平な四角形を呈してします。

書写された経典は不明ですが、増上寺が浄土宗の大本山であることから、浄土三部経の可能性が高いものと推定されています。

また徳川将軍家の墓における石経の埋納は、4 代将軍家綱の葬送に伴って石経が埋納されたことが『東叡山厳有院殿実記』に記されており、17 世紀中頃まで遡ることが明らかです。

第 37 図　９代将軍徳川家重墓出土の経石
（立正大学博物館蔵）

【引用・参考文献】
石田茂作　「経塚」『考古学講座』第 20 巻　國史講習會（雄山閣）　昭和 4 年
石田茂作・矢島恭介『金峯山経塚遺物の研究』帝室博物館学報 8　昭和 12 年
石田茂作　「瓦経の研究」『瀬戸内考古學』第 2 巻第 1 号　昭和 34 年
島根県教育委員会『島根県文化財調査報告』第 1 集　昭和 40 年
三宅敏之　「六角宝幢式経筒について」『東京国立博物館紀要』第 4 号　昭和 43 年
塩野　博　「朝霞市宮戸薬師堂山発見の経塚遺物」『埼玉考古』第 9 号　埼玉考古学会　昭和 46 年
林　宏一　「藤原守道の経筒」『埼玉県立博物館紀要』1　昭和 49 年
坂詰秀一　「経塚の調査」『歴史評論』第 10 号　昭和 51 年
三宅敏之　「六角宝幢式経筒」『草加市の文化財 (1)- 調査報告書 -』草加市教育委員会　昭和 51 年
奈良国立博物館編『経塚遺宝』奈良国立博物館　昭和 52 年
坂詰秀一　「埋経の源流をめぐる問題」『古代學論叢』角田文衛博士古稀記念　昭和 58 年
林　宏一　「藤原守道とその系譜」『埼玉県史研究』第 9 号　昭和 58 年
三宅敏之　『経塚論攷』雄山閣　昭和 59 年
曽根原裕明ほか『宝蔵寺経塚調査報告書』飯能市教育委員会　昭和 62 年
草加市史編さん委員会『草加市史』（自然・考古編）　昭和 63 年
東京国立博物館編『経塚　関東とその周辺』東京国立博物館　昭和 63 年
坂詰秀一　「経塚の概念」『古代學研究所研究紀要』第 1 号　平成 2 年
関　秀夫　『経塚の諸相とその展開』雄山閣　平成 2 年
宇都宮市教育委員会『聖山公園遺跡・根古谷台遺跡発掘調査』　平成 5 年
埼玉県教育委員会『埼玉県指定文化財調査報告書』第 19 集　平成 5 年
立正大学文学部考古学研究室編『礫石経の世界』平成 6 年
池上　悟　「伯耆赤碕出土の泥塔経」『考古学論究』第 6 号　立正大学考古学会　平成 11 年
野沢　均　「埼玉の経塚」『考古学論究』第 6 号　立正大学考古学会　平成 11 年
野沢　均　「薬師堂山経塚造営の背景について（予察）」『朝霞市博物館研究紀要』第 2 号　平成 11 年
水口由紀子　「埋経遺跡が語る十二世紀の南関東—多摩川中流域右岸を中心に—」『中世東国の世界 2　南関東』
高志書院刊　平成 16 年
水口由紀子　「埼玉県熊谷市妻沼経塚の再検討」『埼玉の考古学』II　六一書房　平成 18 年
池上　悟　「下総・龍正院の廻国納経資料」『仏教文化の諸相　坂輪宣敬博士古稀記念論文集』
坂輪宣敬博士古稀記念論文集刊行会　平成 20 年
水口由紀子　「武蔵武士と経塚」『東国武士と中世寺院』高志書院　平成 20 年
水口由紀子　「東松山利仁神社経塚出土遺物について」『埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要』第 3 号　平成 21 年
足利市教育委員会「資料紹介 2　伝　鶏足寺裏山（足利市小俣町）出土の白磁四耳壺」『掘り出された足利の歴史
—平成 20 年度　足利市埋蔵文化財発掘調査パン フレット—』　平成 22 年
池上　悟　「伯耆大日寺瓦経について」『立正大学人文科学研究所年報』第 47 号　平成 22 年
水口由紀子　「地域市研究のなかの経塚—北武蔵の事例を中心として—」『歴史評論』第 11 号　平成 22 年
大澤伸啓　「考古資料からみた小俣地区の歴史　鶏足寺を中心として」『唐沢考古』第 30 号　平成 23 年
八王子市市史編集委員会『新八王子市史』（資料編 1　原始・古代）　精興社　平成 25 年

【立正大学博物館第 10 回特別展】 経塚の諸相

発行日　平成 28 年 1 月 13 日
編集・発行　立正大学博物館
〒 360 - 0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
TEL：048 - 536 - 6150 ／ FAX：048-536-6170
E-mail：museum@ris.ac.jp
URL：http://www.ris.ac.jp/museum/